講 演 録

未来の子どもたちへ
── これからの保育・教育と子育て支援 ──

茂　木　俊　彦
桜美林大学　健康福祉学群・大学院国際学研究科

A Message to All Children of The Future
── The Coming Childcare and Its Support ──

Toshihiko MOGI
J. F. Oberlin University, College of Health and Welfare

はじめに

今ご紹介いただいた茂木でございます．あんなに褒められると，どうしたらいいかわからない感じですけれど，半分か三分の一くらいに差し引いて考えていただいたほうがいいと思います．さて私は，保育や教育，とくに障害のある子どもたちの問題に関心を持って，仕事をしてきたわけであります．この大事な行事への依頼があったときに，お引き受けするべきかどうか，本当に迷いました．この大学には，優れた研究者，教師がいっぱいいるわけですから，外部からうかがって話をすることにどれほどの意味があるのか，そういう意味で非常に迷ったわけですけれど，言われると断れないというところがありまして，結局お引き受けしたということです．

テーマも，日本福祉大学の先生方がお考えくださったものであります．大変，様々なことを話さないといけないテーマになっております．また，それに引っ張られて，短い時間でお話ししなければいけないのに，このレジュメも，たくさんの項目が立っておりまして，それぞれについて充分に突っ込んだお話ができるかどうかわかりません．しかし，とりあえず話しを始めたいと思います．

1．子どもたちの発達とくらしの危機

先ほど，私の『障害児保育論』(1974年）という新書のご紹介をいただきましたが，その本の素材になっている経験についてまず話したいと思います．私は，ちょうど1970年くらいから，それは大学院生から大学の助手になった頃でありますけれど，障害幼児の保育問題や障害児の学校教育の問題にかなり突っ込んで関わるようになりました．当時は障害のある幼児が保育を受けられない状況が一般的であり，また障害があって，それが比較的重いために学校教育から入学を拒否されていた在宅不就学障害児，こういう子どもたちが，家の中で母親と二人だけで過ごしているということがありました．これがやはり発達にとって好ましくない結果をもたらす．場合によって，障害が重い状態になっていくというようなことから，これは東京の場合でありますが，親たちが，都内各地でたくさんの自主的な保育グループを作って，土曜保育とか日曜保育とか，あるいは週に一日，二日ではなくて，三日，四日というものもありましたが，自主的な保育を展開していたわけです．親が保育者がわりをするとか，あるいは保育者の方々が空いている時にお手伝いくださるとか，あるいは学校の先生方が学校の授業が

ない土曜日の午後とか日曜日に保育者になってやってくださるとか．そういうことで，ある意味では多くが素人でありますけれど，一生懸命障害のある子どもたちの保育に取り組んでおられた．これが都内で百数十あったわけです．そのうちで，六十数団体が「障害をもつ子どものグループ連絡会」というのを作り，そこで障害児の保育はどうあるべきか，保育園や幼稚園に入れてもらうためには，どういう取り組みをすればいいかと考え合っていました．また，その当時，通園施設や，今日児童デイサービスと言うところの通園事業が少数ですが設置運営されていましたが，これらは基本的には学齢の子どもしか受け入れない．言い換えれば，幼児は受け入れてもらえない場であったのでして，普通の幼稚園・保育園であれ，障害児専門の施設であれ，幼児は公的・社会的には保育が保障されない状況にありました．で，その辺をどうしたら改善できるかということを話し合い，行政当局に訴えていくという活動をやっておられました．

障害を持つ子どものグループ連絡会というように，「幼児の」というのではなくで，「子どもの」としたのには，実は論議がありました．幼児だけではなくて，先ほど言った学齢の子どもで学校から拒否されて不就学状態になっている，そういう子どもも保育に来ていたので，「子どもの」と表現したほうが適切だということで，そういう会の名称になったわけです．

私はそこに講師として招かれてうかがったり，あるいは講師という形ではないのですが勉強のために参加させてもらったりして，障害幼児の保育の問題に目覚めたというか，取り組みを開始したわけであります．

その後，そういう運動なども一つの大きな力になって，保育園における障害児の保育が公的に認知され，当時の厚生省なども補助金を出す．あるいは，幼稚園についても，私立の幼稚園のみでありましたけれど，障害児を入れて保育をしている場合に，私立学校に対する補助金の一環として特殊教育費補助という，文科省は障害児の教育を特殊教育と呼んだわけですが，特殊教育費補助という費目を作って補助金を出すようになった．これが1974年です．この年が，先ほど勅使先生がおっしゃった障害児保育元年といわれるのは，そういうものが背景にあったわけです．

私の場合，だいたい70年ころから74年にかけての，そういった障害児保育の進展，それにほとんど重なるようにして，通園施設とか，先ほど申しました心身障害児通園事業とか，あるいは保育園・幼稚園の保育に関心を持ち，呼んでいただいて現場に行くということがありました．こうしたことがその後の巡回相談という形につながり，私の場合は，三つばかりの自治体から相談員を委嘱されました．二つ重なる時もあり，一つだけの時もありましたが，十数年間，障害児保育の相談員として，各園を回って実践を観察し保育者と語り合う，研究的にも，みんなで深め合うという作業をいたしました．

そういうことで，私は，保育学というのは学問として学んだことがなかったし，実践とか制度について分析する技術も持ってない状態でしたが，本当に素手で課題に立ち向いながら，園の先生方と一緒に問題を検討してきたという経過があります．ですから，本の中で学ぶことと併せて，実践現場において障害のある子どもたちの姿を見て，この子たちをどのように見て，どのように働きかけていくか，そうするとどう変わっていくか，あるいは，残念ながら変わらないかということを，試行錯誤しながら学んできたわけです．

そうこうしているうちに，障害のある子どもというふうに認定されている子どもたちの問題を越えて，障害はおそらくない，狭い意味での障害はおそらくないけれども，ちょっと気になる子どもがいるというようなことが言われ始めました．

実際的なことで言うと，保育園に参りますと，うちの園にはこれこれの障害のある子どもがいるのですが，その子とはべつに，何歳児クラスにちょっと気になる子どもがいるので，時間の空いたときに見てくれないかと言われるのです．障害はないと思うのだけれど，ちょっと気になるのだと．こういうことを園の側から言われまして，観察し考えてみるということをしてきたわけです．ちょっと気になる子という表現が適切かどうかはわかりませんが，狭い意味での障害はないが，発達上，様々な困難を抱えていて，育ちそびれがいろんな面で見られる子どもたちがいるということ，こうした事実も保育の重要な課題である，真正面から見つめて取り組んでいかなければいけないことだというふうに考えました．そういうところから出発して，障害児の保育とともに，ちょっと気になる子どもの保育をあわせて考えるようになりました．

障害児の保育とちょっと気になる子どもの保育とを，徹底して深めようとすると，クラス集団の保育がどうなっているかということも無視することができないというよ

うなことで，だんだん私も保育の世界にのめりこんできたということがあるのです．

今日，障害のある子どもたちとともに，ちょっと気になる子どもの人数がますます増えてきて，その表現の仕方，子どもたちの表すものも多彩になってきたということがあります．これは，現象だけを見ておりますと，多彩であって，一人ひとりみんな違うんだ，したがって，それぞれについて個別に違った働きかけをしなければならないという話にもなりやすいわけです．それは，一面で真実であります．つまり，一人ひとりをしっかり見て，対応すべきだということは間違いではないのです．しかし，表現されてきている一人ひとりの違いに目を向けて，それぞれについて課題を考えて保育のあり方を考えるというようにしていると，保育の基本的な方針が定まっていかないという問題があります．個別性とともに共通性というか，普遍性というか，様々な課題を抱えた子どもたちの中で共通して見られるものは一体何かということを深める必要があると私は考え始めました．

例えば，落ちつきのない子どもがいる．あるいは，多動と言っていい，そういう子どもがいる．十年，二十年前よりも，この頃だいぶ増えてきている．注意欠陥多動性障害という障害がありますが，その障害があるのか，あるいは障害はないけれども環境的な諸条件の影響で，落ち着かない，いや落ち着かないどころか非常に多動であるという状態になっているのか，即座には判断がつかない子どももいるわけです．

私が，ここ数年関わってきた子どもは，注意欠陥多動性障害であって，同時に家庭環境の様々な困難が重なってきていて，そのために状態が非常に深刻化しているという，最終的にはそういう判断をした子どもでした．

この子のいる保育園は私も密接な関わりがあり，年に二，三回，忘れた頃になると園長から電話がかかってきます．今度いつ来てくれるかと言われてうかがうというかかわり方の園です．園長はこの間，NHK テレビで見た ADHD の番組，注意欠陥多動性障害を取り上げた番組ですが，これに出てくる子どもとそっくりな子どもが我が園にいるというのです．それで，見てほしいと言われたのです．私は，大学の仕事がありますから，2 時半くらいに園に行って，夕方までずっと観察するというやり方です．園長は必ずビデオを撮って送ってきて，見ておいてほしいという宿題を出します．宿題はもうちょっと前に出してくれればいいのですが，だいたい前の日に速達で届くという具合でした．私は真夜中にビデオを見て，予習をする．私が行った時の場面でのその子と，ビデオを撮った時の場面は異なっている．したがって子どもの精神状態も違う．ある日の子どもの行動を見るだけで，あれこれ言うのは難しい．そこで園のほうでも配慮してくださったわけです．

ビデオには収録されていなかった場面ですが，例えば午睡の後のその子の動きは，まことに多動です．起きるのですが，起きてすぐには何かの動作に入らないで，毛布を抱え込んで丸くなって横に寝て動こうとしない．「ホラ，○○ちゃん．トイレに行くのよ」と先生が言うと，無視したような感じで，ますます体をギュッと丸めて動かない．やっと説得に応じて立ち上がって行くときに，また毛布を持ったまま動いて行くのです．トイレに行ったなあ，入ったなあと思っているうちに飛び出してきて，たぶんトイレでおしっこはしてないのですが，ホールをものすごく速い動きで走り回る．そこには乳児さんとかいろんな子がいるのです．その子は 2 歳半くらいでしたね，当時は．そういう危険な状態がある．聞いてみると，ホールで走り回るだけではなくて，ちょっと目を離すと部屋の中から園庭に出てしまう．部屋と園庭が地続きで境目がないと認知している感じです．だから，そこで止まって靴に履き替えるというような動作は，全然入ってこないわけで，ダーッと走って行ってしまうということがありました．また保育者が言うには，注意していないと道に出てしまうので非常に危険だということでした．

私が前もって見たビデオでは，散歩の場面でしたが，すぐにアスファルトの道に寝転んでしまうのです．寝転んでしまうと，放っておいて，「先生，行っちゃうよ」というわけにはいきませんから，先生は付いていて，なんとかして立ち上がらせようとする．そして立ち上がると，今度は手を振りほどいて走り出してしまう，追いかける．よその家の玄関のところに，子ども用の自転車があると，それを引っ張り出して乗ろうとする．ビデオの音声があまりよく出ていなかったのですが，「これは，この家のもので，○○ちゃんのものではないでしょ」と先生が話をしておられるような雰囲気があって，やっと自転車を戻したと思ったら，今度は，その家のブザーを鳴らす．

目的地の公園に着くと，ほかの子が乗っている一人用のブランコに，誰も乗っていないと思っているかのよう

な感じで乗って行って，その子が泣きだすとつねる．ぶつのならよくあることですが，つねるのでなんとなく見ていて感じが悪い．無表情でつねるものですから．

その子の行動について先生方が言うことは他にもいっぱいあって，注意欠陥多動性障害の診断基準にあてはめると，確かにそう診断しても構わないような症状がたくさん出ている子どもでした．

しかし，私は，この状態を見ただけでは判断ができないので，家庭の様子をうかがいたいと担任に言いました．すると，あまり把握できていないが，シングルマザーだということは即座に言われました．でも，それ以上のことが，あまり詳しく把握できていなかった．それで，次回また来ますから，その時までにいろいろと話を聞いたりして，調べておいてほしいと言いました．園としても，どこにネックがあるか，どこを変えればいいと考えるか，ちょっと考えておいてほしいというようなことを言いまして，その日は終わりになりました．「また，来ますから」とふいっと口をついて出てしまうので，園にとっても迷惑じゃないかと思うのですが．そういうことで，結果としては，数年間かかわったわけです．

シングルマザーであるといっても，これは誤解のないように申し上げれば，シングルマザーであれば，必ず子どもが落ち着かなくなるとか，そういう話ではないので，そこは厳密に頭においてお考えいただきたいと思います．

このお母さんの場合は，中学校時代に荒れていて，高等学校には入れたのだけれども，そこで引き続きなんとなく学校になじめなくて，外に出てうろうろする．それも東京に隣接する県ですから，新宿とかそういうところに行ってしまう，そういうところで知り合った男と性交渉を持って，子どもができてしまった．男は結婚するよと言ったので，それを信じて妊娠を継続したのですが，ところが逃げられてしまって，結果としてシングルマザーになったという経過なのです．

さらに言えば，子どもが生まれるので，高校は中退するということになり，働きに出たのです．生まれてからは，今申しました保育園に乳児の時から入れて，保育をしてもらっているわけです．

ずっと遊んでいた人が，朝から夕方まで一つの場所で，しかも工場で働き続けるということは，まことにしんどいことのようで，ストレスが相当溜まっているわけです．落ち着いた生活をしてきた人だって，一日働くのはなかなかきついでしょう．だから，そういうことがもっときついわけで，どうも子どもを迎えた後で，家の中でどうしているのか，翌日保育園に送ってくるまでの間がよくわからない．夜の９時に起きていることは間違いない．それはどうしてかというと，毎曜日あるドラマをだいたい知っている．だから，それを見ているということは起きている．じゃあ，６時から９時まではどうしているのだろうか．お風呂に入れているのだろうか．ご飯はちゃんと作って食べさせているのだろうか．お母さんは，やけっぱちになって，酒ばかり飲んではいないだろうか．いろんな疑問があるのだけれど，空白の時間でよくわからないというのがありました．

朝は朝で，アルコールのにおいをちょっとさせながら，送ってくる時もある．残ったアルコールのにおいなのか，朝からちょっと引っかけたにおいなのか，それはわからないけれども，そういうことが時々あるということがわかりました．

そうすると，ますます，これは生活の乱れから，あるいはお母さんの精神的な落ちつきのなさや，疲労から来ている子どもの落ちつきのなさであるかもしれない．それほどに荒れていると，子どもだってそんなに落ち着くはずがないということは推定できる．

注意欠陥多動性障害というのは，脳に何らかの機能的不全があり，そのために出てくる落ちつきのなさであったり，衝動性があったり，多動性であったり，注意が持続しないという症状が出たりするとされているものです．脳の中枢神経系に何らかの機能不全があるのかないのか．なくてもこれくらいの行動は見られる可能性がある．それでまじめに考えると診断できない．ただ，経過を見ましょうというのでは，保育に関する助言にならないので，担任の先生に，「お母さんに即座に変わってもらうというのは無理だし，変わってもらうにもちょっと時間がかかるであろう．だから，まず園のほうで保育方針を少し変え，重点を定めて取り組んでみて，子どもが変わったならそのことを親に伝えて，この子もいい方向で変わるのだから，お母さん頑張りましょうよ，という働きかけの筋を作ろうじゃないか」と申しまして，担任が頑張ってみるということで，やり始めたのです．

何かというと，しんどいかもしれないし，集団保育なのでその子だけの相手をするわけにはいかないのだけれど，ちょっと時間の空いたときにしっかりと向き合って，あるいは抱っこしてやって語りかけてやるとか，子どもが独り言を言うのを繰り返して「……ということ？」な

どというふうに子どもが言ったことの確かめをするなどして，感情的・情緒的な交流をしっかり深めていってみよう．その上で，言語的コミュニケーションができるならして，この世の中で，自分をちゃんと見てくれている人がいるという実感を園の中でまずは作ろうではないか．本当の親がやるのではないから簡単ではないけれど，しかし，どこにもよりどころがないような状態をこのまま継続したのでは，変化を引き出すのは難しいということで，担任の先生に頑張っていただこうかということになりました．担任も頑張ってみると言い，周りの先生方も支えると言われた．

その園は，2時半頃私が行くと弁当が買ってあるのです．その弁当はなにかというと，夕食で，そのあと職員会議なのです．夜9時くらいまで会議をする．それから2時間半くらいかけて私は家に帰るのですが，そこは計算されていないようで，9時くらいまでディスカッションするのです．そうした会議で，周りの人も担任を支えるからということで，担任も勇気づけられて頑張ってみようということになったのです．

2か月くらい経ったときに，電話がかかってきまして，担任が「もう降りたい」と言うのです．園長に言いましたかと尋ねると，「言っていない」．それは，園長の気持ちもわかるから言いにくい．それで，私にかけてきたというのです．その先生の気持もわかるけれど，あと1か月，もうちょっと工夫して頑張っていただけないか，と申し上げました．「いや，もう駄目だ」というようなやり取りをだいぶやりまして，最後は「頑張ってみる」と言われました．そして，年度末には少し子どもとの関係が改善してきたし，子どもの状態も良くなってきた部分があって，「持ち上がりたい」と自らおっしゃって，翌年度ももう1年持ったのです．その保育者も相当な危機を乗り越えて，しっかりされたという印象がありました．

それで，もちろん医療機関にも見てもらって，医者は診て即座に注意欠陥多動性障害と言ったそうですが，それは診断基準に照らすとそういう結果になる状態なので，確かに注意欠陥多動性障害という診断が出てもおかしくない．ただ，私は心理だから，どうも生活的な背景とか，そこで子どもがどう感じているかとか，どうも気になるものだから即断ができなかったのです．

そこで，先ほど言いましたように，結局，曖昧かもしれないけれど，注意欠陥多動性障害であって，かつ生活的なものが重なってきて，余計に落ちつきのなさやその他のことが深刻化している子どもなのだろうというふうに見たということであります．

今お話ししたのはちょっと極端な例でありますが，子どもたちを見ていると，本当にそういう姿が目立つわけです．落ち着きがないとか，すぐ友だちにちょっかいを出すとか．ちょっかいを出すだけならいいのですが，突き倒したり噛みついたり，年齢不相応にそういうことをやる．年齢不相応というのは，例えば，突き倒すとか噛みつくというのは，2歳前後だと普通でしょう．多動なのも多動ですよね．立ち上がって世界を見回してみると面白いものがいっぱいあるから，目に入って興味のある物ならば，そこへタッタッと走って行ってしまう．そのついでに玄関の上がり框から土間に落ちたりなど，いろんなことがあるわけです．けれども，4歳，5歳になってもそういうことが見られる場合には，年齢にふさわしくない多動性があったり，突き倒しがあったり，噛みつきがあったり，ということができるので，そういう状態を障害と言ったりするのです．ただ，障害がなくてもそういうことが出てくる可能性がありますから，そういうことをこの頃ではよく見ておく必要があるなと私は感じております．

さらに言うと，言葉の発達の問題です．言葉が単発的には出るけれども，うまくつないで自分の意思を伝えることができない．あるいは，保育園で先生などをしているとわかるかもしれませんが，子どもがやってきて語りかけるので，しっかり聞いてやって後で応えなければいけないと思って聞いていると，スーッとまたどこかに行ってしまう．「あれ，なんのために話しに来たのかしら」というふうなことになる．よく考えてみると，その先生と束の間の交流を持ちたいと思って，ただ近づいてきただけなのかもしれない．一方的に話をして，やりとりをしないという子どもが非常に増えているような気がする．言語発達の問題が，子どもによってさまざまな姿を示しておりますが，気になる面がいっぱいある．あるいは，そういう状態の子どもがいっぱいいる．

もっとも大学生の場合も，私はこのごろ気になりますね．私の大学では私のことを可愛いという学生たちがいる．その言葉の意味がわからないのです．「どうして可愛いと言うの」と言うと，「癒されるから」と言うのです．この可愛いというのと癒されるというのはどうやってつながるのかわからないのです．それ以上追及すると関係が壊れるような気がしてそれ以上聞かないようにし

ています．単発的に出てくる，言葉を使う文脈がよくわからない人が増えている．みんながみんなそうだというのではないのですが……．そういう人が文章を書くとちゃんと書いたりするから，余計に不思議です．特に音声言語が単発的で速射砲のみたいにいろいろ出てくるけど，つながりがよくわからないのかもしれません．

こういう状態をずっと挙げだしているときりがありませんが，先ほど言った様々なあらわれの根底にあるものは何か．感情・情動のレベル，そして言語のレベルでのコミュニケーション，その丁寧な積み上げを基盤に成立してくる人と人とのつながりの著しい弱さ，これがあるのではないか．人間関係の調節力の低下という問題も認められますが，それは人と人のつながりの弱さの結果の一つではないか，と思うのです．こう考えていいのかどうか，みなさんにもお考えいただきたいのですが，そういうことが現代の子どもたちにはある．それは乳幼児からすでにあるのではないかというような気がしています．やり取りの関係とか，やりもらいの関係とか，最初は感情レベルにおいてなのですが，何かうまく積み上がってきていないのではないか．それは，言語のレベルに行くと，言葉によるコミュニケーションができないわけですけれど，そこのあたり，そこまで根底にあるものを突き詰めていくと，実は，今，あまり問題は顕著には現われていないけれど，健常児と言われる多数の子どもたちにも，おそらく共通の問題かもしれない．小さい時からの人間関係，それに基づくやり取りの関係，やりもらい関係，共通部分を作り出す営みですね．表面的なつながりはあるかもしれないけれども，こういうことが非常に弱くなってきているのではないかという気がしてなりません．

その背後には大人たちのいのちと暮らしの問題があると思います．大人たちが，落ち着かない，不安を抱えている，子どもと向かい合っても安定していない．子どもと向かい合いながら，瞬時には可愛いなあと思うことがあるかもしれないけれど，それでも，同じ向かい合いの場面の中で，いろんなことが思い浮かんで不安になってくるような，最終的には心ここにあらずというような子どもと大人の関係が広がりつつあるのではないか．大人たちのいのちと暮らしの危機が，いわば子どもたちの発達の危機につながっており，さらにそれを強めているという，そんな印象があります．そこをどうするかということを考えなくてはならないと思います．

この講演の資料に私は「困った子」ではなく，「困っている子」だととらえるべきだと書きました．これは私の言葉ではありません．教職員組合の方々が，特に障害のある子どもに取り組みながら，「この子は困った子だ．あの子さえいなければ」というふうに思ってはいけないのだ．困っているのは教師ではなく，子ども本人なのだという認識が大事だと先生方がおっしゃっていて，確かにこれは聞いただけでは分かりにくいけれど，意味をうかがうとよくわかるなと思います，これは，教師から見て困った子ではなくて，本人の立場に立ってみると，本人自身が困っている状態にある．何をどうしたらいいのかわからない，何をしたいのかもよくわからないような状態に追い込まれているかもしれないというふうに見る．

世界的な動きの中で，障害のある子どもたちを見ていくと，特別のニーズを持つ子どもという言い方がある．これは，「子どもの権利条約」の第 23 条，この第 23 条というのは「障害児の権利」という条項ですが，そこに「障害児というのは，障害ゆえに特別なニーズを持つ子どもとして認識されるべきである」という意味のことが書かれており，続いて「したがって，特別なケアを受ける権利を有する」というふうに書いてあります．これもまた，障害ゆえに周りが困るのではなくて，本人がやはり困っており，様々なニーズを持っているのであって，ニーズがあるからにはそれを社会的に対応していく，満たしていくということが必要であり，子どもの側からすると，ケアを受ける権利を有すると見るべきではないか．

ですから，これらは一連のつながった認識だと思うのです．困った子ではなくて，困っている子，障害児というのは，特別なニーズを持つ子どもであって，特別なケアを受ける権利を有するという見方，だから，子どもたちの状態に，いちいち振り回されずに，根底で欠落しているのは何かということを見て，それを子育てや保育の中でどう立て直していくかということが課題だと見ると同時に，子どもの立場に立って問題を考える，私は，そんなことの重要性を保育現場とか学校とかでうかがいながら学んできたわけです．

２．子どもは，大人との間で「よい関係」＝心理的よりどころを作りながら，外界に向かい，活動を展開する．

では，どういう関係を築いていくのかということです．やりもらい関係が弱い，人とのつながりが弱いという時

に，積極的に今度はどう取り組んで強めていくかということですが，私は，子どもは，まず大人と間での「よい関係」＝心理的よりどころを求めている，それを作りながら，外界に向かい，活動を展開する存在だというふうに見る必要があるのではないかと思っています．「よい関係」というのは，どういうことか．少し具体的な例を取り上げてお話しします．私はよく「子どもに尋ねる気持ちになる」という言い方をするのですが，親であれ，保育者であれ，学校の教師であれ，上から子どもを眺めていろいろと指示，指令を出す前に，子どもたちがうまく表現できていないものも含めて，「どういうことが言いたいの？」とか，「今，どんな気持ちなの？」とか，「どんなことがやりたいの？」とか，尋ねるという姿勢に立つことが非常に大事ではないか．これは，言葉を使って尋ねるということに限定されない．いわばそういう気持で子どもと接するということを言いたいわけです．

例えば，若い母親が赤ちゃんと向かい合っている．その時に，赤ちゃんが泣く．泣いたとしたら，お母さんの心身の状態が良ければ，きっと尋ねるでしょうね．心身の状態がよければという条件が必要ですけれど，おむつが濡れて気持ち悪いのかなとか，お腹がすいたの，さっきおっぱいあげたばかりなんだけどなあとか，どこかかゆいところがあるのとか，そういうことを思いながら尋ねるのです．尋ねている時というのは，見ていると実に人間的なのです．つまり，やさしい気持ちになっているわけです．そういうときの親は，体も柔らかいし，表情も柔らかい，声の音色も柔らかいし，優しさがそのまま表現されている，子どもはそのまま受け止める．しかし，それは赤ちゃんだから感情レベルで受け止める．感情の交流が成り立ってくる．これが積み上がっていく．こういうとことが大事で，１日１回程度でも，短時間でも，そういう関係ができる，尋ねる関係ができるということが非常に大切だというふうに思うのです．お母さんが，その子にとって大変重要な他者になる．重要な他者，世の中に他者はいっぱいいるけれど，その中で一番大切な他人，これがお母さんというふうに確定してくるわけです．一気に確定するわけではなくて，これは，大学１年生の方は習われたかどうかわかりませんが，だいたいにおいて生後８か月くらいで成立する愛着の関係で結実してくるのです．愛着の関係というのは，英語をそのまま使ってアタッチメントという場合もありますが，その人が一番大事であり，心のよりどころ，心の絆ができてくるという関係です．このことは，お母さんにべったりくっつくということでもわかりますが，それ以外の他人が近づいていくと，人見知りをするという逆の反応を示すことで，お母さんが一番重要な他者で，ほかの人は見知らぬ他人であるという区別が付いてきたということですね．大人一般がみんな大事なのではなくて，特定の大人が大事になってくる．これが，もっと前からのやり取りの関係の中で，成立してくるわけだし，最初のやり取りは，お母さんが尋ねる気持ちになり，感情を送り込んで赤ちゃんの感情を受け止めるという積み上げが非常に大事だということになっています．これが「よい関係」なのです．

じつは先ほど言い間違えたのですが，よい関係ができてくると，あるいは愛着の関係がしっかりできてくると，赤ちゃんはお母さんにべったりくっつくかというとそうでもないのです．安心できるよりどころができると，今度はお母さんから離れて遊ぶということもやり，あるいは，お母さんから離れて探索活動をやる．新しいものを見つけると，取って口に入れて舐めて確かめるような活動をする．お母さんはそれを「汚い汚い」と言って止める．あるいは，おもちゃがあると，それをいじっている．うまくそれで遊びきれない場合に，お母さんの顔を見て，「ちょっと手伝って」というような顔をする．実は，愛着の関係ができると，かえってお母さんから離れて飛び立って，周りの世界に働きかけをしていくという関係ができてくるわけです．本人と大人の，本人とお母さんの二者関係ができるに従って，子どもはそれを拠点にして周りの世界に飛び立っていくという，この構図ができあがるわけです．

これが非常に大事であって，私どもが子どもの発達相談などをやっていますと，親子の絆がしっかりできていないと，全くお母さんの所に行かないか，あるいはお母さんにしがみついて離れないかというような，非常に極端な動きを示して，何を見せても一人で遊んでくれないということが起こったりします．このように，逆の例でもわかるのです．こういう関係を作る．これはお父さんがお母さんに準ずる役割を果たすようになったり，保育園に行くようになると，担任の先生がそのようになったり，担任からするとちょっと悔しい思いをするけれど，担任ではなくて隣の先生に親しくくっついて行ってしまう場合があって，「あの子，こんなに世話しているのにどうしてよ」と言いたくなるような場合もあります．それは心理学的にはうまく解明されていないけれど，どこ

かウマが合うとか合わないとか，日本語のニュアンスで喋ったほうがピッタリするのかもしれません．

いずれにしても，心のよりどころというのが，家の中では普通はまずお母さんとの間でできる．これは，お父さんとの間でまずという順序でも構わないわけですけれど，一人できて，それに準ずる人がいて，保育園に行くと先生がいて，友だち関係の中で○○ちゃんとすごく強い絆ができている，○○ちゃんがきていないと探し回るとか，そういうようなことがあったりもするでしょう．こういうことで，人間関係がどんどん広がりながら，しかし，子どもの精神的な安定の拠点ができてくるという関係があるのだと思います．

こういう関係ができていく中で，言葉が獲得され，言葉が使われていく．一番のよりどころで，やり取り・やりもらい関係があるわけですから，そういう関係の中で言葉が使われる．コミュニケーションというのは，コミューンな部分を作り出す，共有・共通部分を作り出すということですから，言葉のやり取りの中でわかり合うとか，こういうことを言いたいんだということで伝わるとかということでしょう．だから，言葉を獲得したら，それだけでコミュニケーションができるということではなくて，根底においては人間のつながりが一番大事というふうに私は思います．その中で，道具としての言葉が使われるというぐらいに考えたほうが適切ではないか．

今の子どもたちは，そこのところがどうもしっかりと確立されずに年齢を重ねてきている例が多いのではないか．そこのところというのは，心の絆をしっかり作り上げるということです．しかも，心の絆はお母さんとだけできるのではなくて，相手が拡がっていくという関係の中で，しっかりした心のよりどころができる．その部分で弱さがあるという感じがします．

子どもの居場所という言葉が使われます．これは学校教育も含めて，あるいは不登校の子どもなどの問題を論ずるときに，学校にあの子の居場所がないという言い方がされたりします．居場所というのは，要するに物理的な空間ということではなくて，本当に自分を受け入れてくれる集団，あるいは人間がいるという実感があるということを意味しているのではないでしょうか．それは，子どもだけではなくて，家に帰ると針のむしろという人は，寝る場所はあるのだけれど，居場所がない．だから，家に入る前に飲み屋に行って，ちょっと一杯引っかけないと入れない．そういう人はいっぱいいますけれど，実際に．居場所というのは，そういう精神的なものが中心でしょう．だから，居場所がある，誰かが自分を見守ってくれている，受け入れてくれる，最低一人でも．こういう実感がしっかり持てるようになったら人生しっかりと生きていけるようになる．でも，それに至るところが，今，子どもたちにおいて弱いのが，どうも気になる．いろいろ気になるところの根底はそこではないかというのが，私は実感としては思っているのですが，皆さんはどう思うでしょう．

だから，それを作り上げる．非行少年なんかもそうです．私は，学生時代，非行少年の問題を考えたり，非行少年と付き合うサークルに入っていたのですが，私は大学の助手から，広島大学に移っていくときに，学生時代に付き合いのあったその人たちとちょっと会ってみたくなって，何人かと会ったのです．家が転居して会えなかった人もいますが，会えた人はうまく立ち直っていたのです．荒れていた雰囲気は残してはいますが，だいたい立ち直って仕事をしたりしていた．どうやって立ち直れたのかといろいろ聞いてみると，「おふくろがさあ，いろいろうるさいんだけど，見捨てなかった」とか「先公が，うるさいんだけど，おれのことをずっと考えてくれていた，おふくろは駄目なんだけど」とか，いろいろと仕分けをする人もいますが，要するに，一言で言うと，誰かが自分のことを大事に思って見守ってくれている，滅多な事はできないなあと思う．あの人のためにも悪いことはできないと，そういうような感覚を持っていることに気がつきました．

NHK出版の『14歳　心の風景』という文庫本がありますが，その中に出てくる高校生もそういうところがありますね．中学校時代に荒れていて，暴走族のキャップをやっていた．そして，高校になったら真面目になろうと思ってやめたのだけれど，後輩に自分のバイクを貸した．自分は後ろに乗って後輩が運転して，事故を起こして相手の人が亡くなってしまうという大事故を体験するのです．そこに出てくる高校生ですけれど，警察に呼ばれて尋問されて，そのあと出てきたところに，中学校の元の担任が立っていて，「待ってるからな」と一言かけてくれるのです．そこで号泣した．号泣という言葉は，この頃はやっておりますが，その場合は本当に号泣だったようです．思わぬ言葉がかかってきたわけで，それで立ち直っていくわけです．よりどころがあると，成長できるというだけではなくて，いろんな問題も起こさずに，

しっかり育っていけるというふうに私には思えるのです．ここに自分を見守る人がいるという実感があるかどうかということが，非常に大事なことだと思います．

そういうことができるためには，私は，最初に申しましたが，大人の生活と労働が何とかならないといけないと思います．例えば，お母さんが，お父さんでもいいのですが，子どもと向き合って，子どもに尋ねる気持ちになるのは，先ほどはやや注意深く，「心身の状態がいい時は」と言いましたが，本当に心身の状態が良くなければ尋ねていられないです．保育者の方だって，家に帰るとそうです．何でうちの子だけこう泣くのか．園にはいい子がいっぱいいると思ったりして，お母さんは疲れてるんだからと言いたくなったりする．尋ねるどころではない．しかも，お父さんがゴロンと寝転んで，テレビを見たり新聞を見たり，本当に読んでいるふうには見えないのだけれど，子どものところには来てくれない．おれが相手しようかとは言ってくれない．これが厭ですよね．さらに，茶碗洗わなくてはとか洗濯しなくてはとか，洗濯したのだけれど取り込んだのをいつ片付けようとかいろいろ考えていると，「どうしたの？」と口では言いながら全然心が相手に向かってないということが起こりうるでしょう．それは子どもが感じ取ります．向かい合っていながら気持がこもっていない．言葉をかけながら，心が送られていないという関係．これは何とかしなければ駄目です．これは，お父さんの心がけで変われる部分もないことはない．しかしながら，もっと大きく見ると，労働時間がもっと短くなって，そして，働いただけお金が入ってきて，年金はちゃんと受け取れるという安心感があるということ，お父さんが，疲労しすぎないくらいの時間で家に帰ってくることができて，自発的に茶碗を洗うとか，自発的に洗濯物を整理するとか，自発的にというところが大事です．お母さんと話をしていると．「言えばやるんですけれどね」と言うから，私も意地悪く「言わないとやらないんですか，お宅では」と言うと，「そうなんです．それがイライラの元で」と言うのです．口では平等，平等と言うけれども，全然そんなことはないと．でも，心構えで何とかなる部分はあるとは言っても，それは非常に小さいので，もっと積極的的にやれるようにするには労働時間が短くなって，賃金もそれなりに，これならまあまあと思えるくらいに貰えていて，将来の不安もなくて，ということが必要です．

保育園や幼稚園やその他もそうですね．少ない人数でたくさんの子どもたちを受け持つとなると，やはり「先生は，あなたの先生というだけではない．他にもいっぱいいるのよ」ということになるのです．「あなたが泣くから，ほかの子も泣いちゃうじゃない」．いろいろ親しくしている保育園で聞くのは，「今日はどうしてこんなに静かだったのかしらね．○○ちゃんと△△ちゃんが休みだ」．これは親しくしている園じゃないと，私が行っている時はおっしゃらないのですけれど，これは実感でしょうね．やはり，非常に気を使わなければいけない，あるいはきめ細かく相手しなければいけない子どもが，たまたま風邪で休んでいたりすると，クラスが急速に静かになっていくと思う．それは，冷静に考えると，一クラス何人というクラスの編成基準とか，補助者が入るか入らないかとか，いろんなことによって決まってくるところがあって，保育者の心構えで変わるわけではない．ここは，学生諸君には言いたいのですが，学生の皆さんは，子どもに対する見方とか取り組み方には関心をもつのですが，保育条件の話にはあまり興味がないように見える．けれども，本当は保育条件がしっかりしていないと，保育者が保育者として機能しない．働けない．結果は子どもに行くわけです．母親もそうだし，父親もそうだし，保育者もそうだし，学校の教師もそうです．

先週，私は，京都で開催された幼稚園の先生方の教育研究集会で，講演と助言をするよう頼まれて参加してきました．2日間いろいろと勉強させていただきましたが，幼稚園は保育園よりもっと条件が悪い面があります．公立幼稚園と私立幼稚園の間にも違いがありますが，障害児の数も非常に多い．受け持ち人数も多いのです．苦労して取り組んでおられる．実践報告は素晴らしいものがありましたが，改めて気づかされたのは条件面では非常に厳しいということです．何とかしないといけないですね．

家庭の中での協力関係，職場における民主的な関係，こういうものは労働条件が悪く，社会保障・社会福祉も破壊される状況の中で，私たちが何とか持ちこたえ，子どもにとっていい生活を作り出していくために，どうしても構築し守っていかなければなりません．

３．生活を豊かにする，ということ

そういった関係を作る上でも，子どもに対する働きかけを豊かにしていくためにも，生活それ自体を豊かにしていかなくてはならないということはあるかと思います．

子育て支援などという時には，単純にお母さんの考え方や取り組み方だけを問題にすることがありますが，それでは不十分だし考え方によっては誤りだということ，父母，家庭が置かれている状況，社会経済的な背景にまで目配りをして，親たちにそのあたりのヒントをどう提供していくかということは，やはり大事なのではないかと思うのです．

私は，よく「生活の中に，発達の栄養源を」というふうに言ったりします．子どもの生活の中に，子ども自身が発達できるようにするための栄養源がちゃんとあるということ，創り出されているということが大事なのではないか．例えば，保育園と家庭が本当に共同して子育てをするという場合に，よく先生方が考えるのは，家庭との連携ということであって，園で頑張るけれども，同時に，家庭でもお父さん，お母さんが頑張ってくれないと，園で取り組んだものが家庭で崩されちゃう．だから，親御さんにもそういうことを言って，協力してもらおうと話します．これはよくやることです．例えば，パンツを履くときに，向きだけちゃんとやってやれば，あとは自分で足を入れるので，それを見守るようにしてほしい．すぐやってあげるのではなくてとか，前のほうだけ引き上げて後ろに気が回らない子どもには，ちょっと声掛けをしてやるとか，きめ細かく保護者に助言をするとすれば，そんなことを言ったりしますね．

一方，保護者は，もちろん子どものために言ってくれているわけですから，「はい頑張ります」と言うのです．でも，実際にこれをやるのは，容易ならざることだと私は思います．家の中で子どもにパンツは一人で履けるようにとか，途中まで行けるのなら途中まで手伝ってあとは自分でやらせるとか，最後だけ手伝うとか，こういういろいろやってみると時間がかかる．だから，「今日だけよ」といってやってあげて，また，次の日も「今日だけよ」と言ってやってあげる．こういう具合で，子どもの活動を奪ってしまう．園では頑張ってやるのに，家では甘えてやらないという関係になってしまう．そうすると，やはり，いろんなことが難しくなってしまいますね．ですから，私は，親には機械的な言い方をしてわかりやすくするのですが，そういうことをやるためには30分早起きしてやらないとうまくいかないのではないですかと言う．普段通り，これまで通りの生活時間で，先生が言うことをやろうとしても無理ではないでしょうかというようなことを申し上げるのですが，そこが大変なところなのです．30分早起きをするというのが．疲れているから，本当ならあと10分寝たいという時に，逆に30分早く起きろと言われるのですから難しい．生活時間，時間の配分といったものも改善しながら，栄養源をちゃんと入れ込んでいくということが大事だと思います．

私がちょっと助言したお子さんで，軽い知的障害のある女の子でしたが，からだがか細くて，風邪をひくと1週間くらい休んでしまう状態の子がいました．身体の弱さをもった子どもでした．保育園のからだ作りの取り組みで，この子が強くなれるかというと，もうちょっと補充しないと駄目だ．その子だけ動かすというわけにはいかないということで，お母さんに，家から自転車に乗せてくるのではなくて，歩いて通ってもらうことにしようと思いついたのです．思いつくほうは簡単なのですが，実行するほうは大変でして，自転車だと5分くらいで来てしまうらしいのですが，その子がか細くて歩く力も弱いということもあって，あるいは目的意識的に歩くということも弱いために，30分くらいかかってしまうだろうとお母さんは予測したのです．普段の買い物の経験などからもそれがわかるのです．それで，担任がいくら言っても，うんと言わない．正直なお母さんですね．それで，「先生，直接会って言ってください」と言われる．保育に責任を持つのは保育者であるから，私があまり介入するのはよくないという考えで，普通はやらないのだけれども，では会いましょうかということで話をして，そうしたら，やるということになったのです．

本当にまじめにやったようではありますが，園の先生に言わせると，「あのお母さんはずるい」というのです．どうしてかというと，時たま保育園の近くまで自転車できて，見えないところで降ろして，しゃあしゃあと歩いてくる．だからずるいのだと．私は，ずるいと言っても歩いてくる日もあるのでしょうと，そっちのほうが多いのでしょうというと，まあそうなんだけどという．私はそれで妥協するのでいいのではないか，自転車で来たと思う日は，冷たく迎えたらどうですかと言ったのです．そしたら，保育者の方はまじめすぎることがあるので，冗談を本気にされたら困ると思いましたが，でも，本当に冷たく迎えたようなのです．それこそ冗談じゃない．

この例は，お父さんも共同して早起きして，食事を早く摂って「さあ，歩いていこう」というふうにしてやった例です．1年くらいたって，本当に逞しくなりました．これは，数値的に表すことはできないのですが，確かに

逞しくなって，皮膚の色も焼けてきたし，休むとしてもすぐに回復してくるというような状態になってきました．かつ，歩いていて，途中で犬を飼っている家があると，お母さんに言わせると早足になるというのです．それは，目的を持って歩くという力が付いてきたのではないでしょうかというと，「でも，困るのです，そこに座りこんじゃって動かないのですから」という．それで，相談の専門家というのは，そこでまた言わなくてはいけないのです．「でも，話す材料はできてよかったではないですか」と．「何を言っても駄目ですね」とお母さんは言っていましたけれど．「結局，歩けということでしょう」と．本当に変わってきました．

ですから，生活を豊かにするという時に，父母が共同して場合によっては生活時間も変えて，子どもにとって豊かな生活であるかどうかを自己点検するというようなこと．それを保育園や幼稚園や学校の先生が，側面から支援したり，ヒントを出してあげたりすることが大切な取り組みになるのではないかと思います．

４．自然，文化を子どもたちに

他方で，保育園側，幼稚園側は，私は最近，不足しているのは教材研究だと思います．とりわけ教材研究と言ったときに，既成の絵本をどうするかというのは研修会があります．しかし同時に，例えば自然がある．自然も教材になる．自ずとなるのかというと，そうではなくて，やはり教材化するという保育者独自の研究が大事ですね．例えば，お散歩に出た時に，道ばたに花が咲いている．そういうとき子どもにどう働きかけるか．子どもの年齢によって違うのではないでしょうか．例えば，２歳くらいだったら，「ああ，お花が咲いているね．きれいね」でいいかと思います．しかし３歳になると，「お花が咲いているよ」の後に，もう一つ付け加えないといけない．「このお花は，○○という名前でね」というふうに．それに加えて「きれいね」と語りかける．

花という一般名詞．そのあと，個別の花の名称，あるいは香りとか，いつごろ咲くとか，こういうような知識を持っていることによって，散歩の中で花を教材化するということが初めてできるということです．何歳になっても，どんな場面でも「あ，花が咲いている．きれいね」と言う保育者がいるように思います．私は，そういうことも含めて，散歩は何のためにするのかということを考えたりしながら，何でも教材になるとは言いながら，放っておいても教材になるのではなくて，研究的な作業をして，何歳にはこんな働きかけがいいのではないかと考えた時に，教材になるということです．

それから，先ほど軽く扱いましたが，絵本などでも，文化としての，あるいは児童文化としての絵本とか科学絵本とか，絵本をどう扱うかというのは，すごく難しいでしょう．ただ読んで，絵を見せていて，絵本の読み聞かせになったという人もいるでしょうが，『ちいさいなかま』という雑誌の６月号に，心理学者の田代康子さんという方で絵本の研究をしている人が書いておられましたが，そんなものもご覧になって考えていただければと思います．

最後に言いたいのは，生活者として，あるいは働く者として，保育者も教師も親御さんも，同じ立場で語りあうことが大事だということ．子どもを預けている，預かっているという関係はありますけれど，そして，人質を取られているようだという親もいますけれど，それはある程度あたっているかもしれませんが，しかし，働く者として，現代の社会の中で生活する者として，共通の悩みとか矛盾とか抱えているのですから，そこで共感関係を作り出すことが大事だと思います．そういう意味では，子どもを預かっている側の人たちが，自らの生活を語るとか，自らの労働について語ることがまずは大事だと思います．

先生方が，自分のことは語らずに，「お母さん，この頃どうですか」と家の生活のことを語らせようとしても，親は尋ねられるとある程度は答えるでしょうけれども，本音はなかなか語ってくれないと思います．だから，保育者や教師が，例えばひどく疲れちゃっていて，「正しいとは思っているのだけれど，私はできないのよね」と，ちょっと言ってくれると，そこを正直に言っていただけると，「私のところもそうなんです」と保護者も自ずと言うようになるのではないでしょうか．先生のところもそうなのか，私もそうなんだと．早起きしなきゃと思いながら早起きできないとか，私もごまかす時があるのよとか．自分の子どもを保育園に送っていくときに，車の中で牛乳１本飲ませて，連絡帳にはたくさんのおかずを書いたのだけれどと．保育者だからこそ自分の子どもの保育園には，ちゃんとやれていない姿はあまり見せたくないでしょう．だから，時には嘘もつく．重大な嘘はつかないにしても．そうしないとやっていかれないということがあったりする．そういうことも親御さんに言った

りすると，「私も嘘書いていますよ」と，そういう話になるかどうかはわかりませんが，正直に語って，「本当に大変なんですよね，子育てというのは」というような対話が成り立ってくると思うのです．保育者や教師の中には，あまり，正直に自分の生活を語ると信頼が全く地に落ちて，その後，親と一緒に共同していくことができなくなるほど深刻な例もあるかもしれないから，そのへんは適当に途中でとめて，お話をされたらいいと思いますけれど……．本当に気持ちを平らにしてお付き合いをする．

さらに保育者などに子育て支援の問題で，お願いしたいのは，私は，親が語るちょっと小さなことでも，小さいと思えることでも真正面から受け止めるという姿勢が大事だと思って受け止めてほしいということです．聞いた途端に，「お母さん，そんなことでくよくよしなくても」と言ってしまうと，お母さんは後を続けられない．やはり，それぞれの人にはそれぞれの悩みがある．それは，相対評価にはなじまない．そのお母さんの悩みはせいぜい１で，別のお母さんはもっと大きな悩みを抱えている，それは５だというようなことではない．その人にとっては，それがいま最大の悩みであるかもしれないのです．そのことを受け止めながら話を聞く，あるいは，こちらも話をする．そういう信頼関係ができていく中で，場合によっては，「おかあさん，そんな小さなことでくよくよしなくてもいいんじゃないの．大丈夫よ」という先生方の助言が意味を持ってくる．絶対，それを言ってはいけないということではありませんが，基本はやはり分かり合う，共通の基盤を作るところにあると思うのです．

今日は人間関係の事ばかり話していたような気がします．しかし，人間関係を基盤にしながら，実は，自然とか文化とか，あるいは他の人々などに，子どもたちがどう取り組んでいくかということが肝心なのだということを強調したかったのです．二人関係の中で子どもは発達していくわけではない．二人関係は拠点ではあっても，それが終着の目標ではない．

例えば，私と向かい合っている子どもが，私から吸収することはたかが知れている．人類はもっと豊かな文化を作り出してきたし，自然は恐ろしいことも含めて，多彩な姿を見せている．そこに向かって子どもたちが立ち向かっていって，必要な物を摂取する方向を取れるように支援する．いろいろな活動を展開する時に人間関係が拠点になるというような構造で，保育とか子育てといったようなものを考える必要があるのではないかと思います．

実は，私の勤務している大学は，日福大に比べますとずっと後輩です．保育士の養成は行い始めていますが，今，３年生が最上級学年であります．そこから来て先輩のところに講演をするなど，じつにおこがましい．一つの考えとして受け止めていただいて，批判的にご検討いただければ幸いです．どうもありがとうございました．